



有機加工食品のバリューチェーン全体で 国産有機原料の拡大に取り組む

規格外品を加工品にという既成概念を破り
加工適性原料の栽培から有機生産者と取り組み
メーカーとつなぎ競争力のある商品を開発する

2025/9/24

有機農業の推進に向けた意見交換会

一般社団法人 日本有機加工食品コンソーシアム

代表理事 辰巳千嘉子

理事 南埜幸信

生産者

- ・ 作付け計画が作れない(青果用途とは別)
- ・ メーカーの原料要件・要望が不明
- ・ 青果の延長では原料にならない

集荷業者

- ・ 有機区分管理による非効率
- ・ 小ロットの非効率
- ・ 小ロットゆえの品質のばらつき大

加工業者

- ・ 製造計画が作れない
- ・ 有機原料価格がかなり割高
- ・ 加工特性のある原料がない

問屋商社

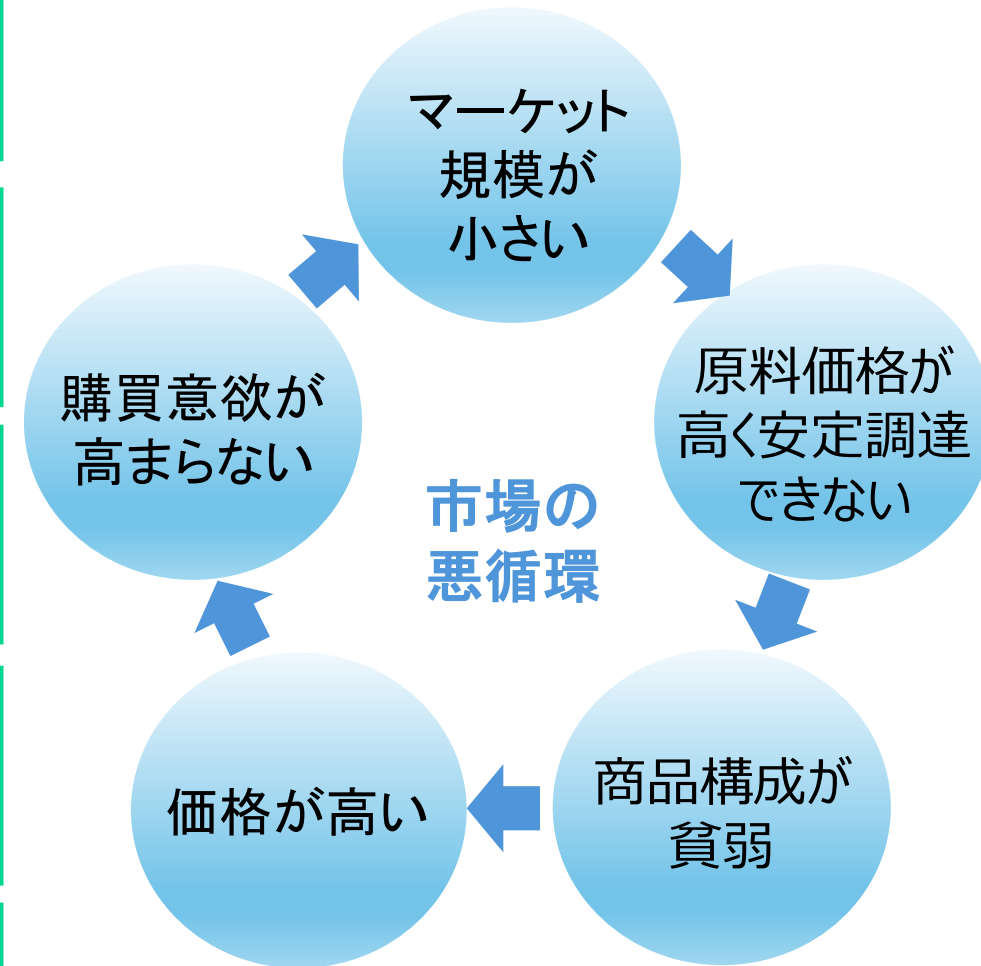
- ・ 取組が商品から見えない
- ・ 市場が小さすぎる
- ・ 内部対立が起こる(顧客の争奪)

小売業者

- ・ 調達の不安定
- ・ 転換期間中のマーケットが狭い
- ・ 商品構成が偏る

消費者

- ・ 価格が割高
- ・ 品揃えの不満



市場の
悪循環

バリューチェーン全体で
取り組むことで市場を拡げる

日本有機加工食品コンソーシアムの主な取り組み

1. オーダーエントリーシステムの運用

有機小麦・大豆について、生産者（生産量）と加工メーカー（必要量）をエントリーしてもらい、生産計画から調整・契約までを行う

2. 有機栽培に取り組む農家を増やすための学習会、懇談会

栽培技術、補助金の活用、調整施設や物流等の相談 など

3. マッチング

オーダーエントリーに結びつけるための生産者と実需者のマッチング

4. その他の商品開発

有機米粉（専用品種・再生二期作の実証、メーカーによる試作品開発）

有機冷凍野菜の開発 など

有機穀物の栽培拡大のための政策的課題

1. 転換期間中の圃場・生産者への支援

◆加工メーカーが転換期間中の原料を避ける傾向は変わらない。

- 同一商品で包材を2種類在庫を持つリスク、在庫負担
- 消費者が残留農薬のリスクへの不安を持つ

⇒有機認証品なのに、特別栽培としての扱いになり、有機の取引価格では動かない。

◆有機圃場は転換期間中を経て誕生

転換期間中の圃場をきっちり有機に育て導く政策的な支援が重要。

転換期間中圃場支援の政策課題

◆転換期間中の期間は2年間だが、支援補助金は1年目しか出ない。

◆すべての転換期間中の圃場に支援があるのではなく、
生産者あたり、初年度に登録した圃場のみが支援対象になってしまっている。
順次拡大していくすべての転換期間中圃場に転換支援補助金支援を検討してほしい。

有機穀物の栽培拡大のための政策的課題

2. 有機農産物の取り扱い支援の拡充

- ◆ 有機農産物はその取扱いに有機独特のアナログ作業や、区分管理コストがかさむ。
⇒このコスト増についての支援を考えてほしい

区分管理コスト

- ・ 慣行農産物との切り替えコスト(共洗いなど)
- ・ 清掃や格付け確認、台帳記録管理コスト 等

有機独特の労力コスト

- ・ 穀物は規模の経済が働く世界。
小ロットの区分管理は、労力的にも慣行の約2倍の労力コストがかかっている。

- ◆ 新規就農者への地域有機農家によるサポート体制への支援
新たに有機栽培に取り組む際には身近なサポート体制が必要(地元有機農家など)

有機穀物の栽培拡大のための政策的課題

3. 安定した有機穀物の生産を支える土づくり支援

1) 地域の有機物を利用した高性能肥料生産施設への支援

- ・ 有機食品拡大のためには有機農産物の生産コストを下げる必要がある
 - ・ 市販の有機資材は病害虫のリスクが高い
- ⇒地域の未利用有機物を活用した高性能肥料生産施設を地域ごとに

2) 休閑緑肥活用支援

- ・ 穀物生産での養分供給的堆肥の使用は病害虫発生等のリスクをはらむ場合がある
- ・ 地力窒素を高め、長期的な増収と安定供給のためには、輪作体系のなかで、緑肥(休閑緑肥)の導入は有効。

⇒売り上げは無いが、土づくりのための緑肥導入支援が必須。

収穫物の無い休閑緑肥の栽培中は、有機圃場に対しての直接支払い金が出ない現状。
有機栽培に限り、1年間収入の無い休閑緑肥の輪作導入のための補助金を検討いただきたい。

有機穀物の栽培拡大のための政策的課題

3) 収益型緑肥導入の支援

- 収益の無い緑肥ではなく、売り上げ収益のある緑肥の導入の促進をはかる。
- 油脂用ひまわりや油脂用ごま等の緑肥の導入促進
 - 日本の植物油脂の自給率は2%と深刻な状況
 - 油脂用ひまわり
 - 世界的に植物油のなかでひまわりのシェアが拡大。品種改良も進み、油分の含有率が30%から45%と向上。栽培容易。
 - 蜜源として、景観観光植物として、油脂の絞るかすの飼料や肥料への活用等、地域資源の有効ネットワークも創造できる。
 - ホクレンの供給する油脂用ひまわり「春りん蔵」は、特にアーバスキュラー菌根菌との共生力が高く、リン酸吸収係数の高い火山灰系の土壌改良に有効
 - 課題としては種子の安定供給。ホクレンは種苗会社の取り扱いではない。
 - 油脂用ゴマ
 - アフリカ原産で高温干ばつに強い。栽培容易。
 - 収穫・調整・乾燥が機械化一貫体系が構築できない。
 - 海外では機械収穫一貫体系可能な品種改良が進んでいる様子。日本への導入を促進してほしい。
- 雑穀出荷向けの緑肥の導入促進
 - たかきび、キヌアなど、有機雑穀としての需要が高いものを緑肥として導入

有機穀物等の現状と課題

有機穀物等の現状

有機小麦の現状と課題

1. 平均反収と価格

原麦の反収

有機: 300kg/10a 慣行: 520kg/10a

⇒有機は慣行の約40%減の反収

小麦粉の価格比較

一般流通: 有機 480円/kg ~ 320円/kg 慣行 200円/kg

⇒原麦の価格差 + 製粉歩留まり + 区分管理コスト ⇒有機は慣行の約1.6~2.4倍の価格

2. 現状の課題の整理

- ・北海道だけでも約1000トンの滞留在庫(約4年分) ※うち約50%が転換期間中有機小麦
- ・小ロットゆえの品質のばらつきをどう埋めるか⇒ばらつきが大メーカーの取り扱いを阻害
⇒大きなメーカー参入による商品開発と価格差を埋める政策の同時進行を
(有機パン、有機うどん、有機パスタ、有機そうめん、有機ミックス粉、有機パン粉 等)
⇒小麦粉の価格を約25%程度下げられると、在庫の問題は解消に向かう
- ・本州以南では大麦の栽培も拡大⇒国産有機麦茶の需要拡大

有機大豆の現状と課題

1. 平均反収と価格

大豆の反収

有機 230kg/10a 慣行 270kg/10a

⇒有機は慣行の約15%減の反収(ほぼ近い反収レベル)

製粉行程がないので、区分管理コストは少ない

価格比較

一般流通: 有機 450円/kg～417円/kg 慣行 250円/kg

⇒有機は慣行の約1.7～1.8倍の価格

2. 現状の課題の整理

価格差が小麦ほどではないので、供給は需要に追いついていない(不足気味)

滞留在庫としては、下等級の大粒約100トン、小粒約100トン ※すべて転換期間中

有機穀物の現状と課題

1. 米粉専用品種の取り組み

- いまのところ、米粉専用品種の反収は、ほぼカタログどおりの実績
- 現在米粉専用品種の作付けに、10aあたり90,000円の補助金をいただけている
- 飯米を加工用に向けていたのでは、原料も集まらないし、価格も加工では使えない。この補助金の運用をぜひ継続的にお願いしたい。

2. 有機での再生2期作への取り組み

- 米価格高騰により、加工用有機米の確保が困難になっている。
- 今年から千葉県の匝瑳市で、極早生品種のふさおとめの有機圃場で試験実施
- 収穫時の圃場の状態を確認しながら、条件の良い水田から30cmの程度の高刈を実施

3. 現状の課題の整理

- 米は除草さえ克服できれば、有機での栽培は可能。
- オーレックス社のWEEDMANは、株間と条間の同時除草が可能な乗用除草機。この導入支援を検討いただければ、面積は拡大基調になる

有機冷凍野菜の現状と課題

1. 冷凍原料の確保と作付け導入

- 冷凍加工工場から1時間30分程度以内で工場まで搬入できるエリアの有機生産者に作付けをお願いしていく。
- 現在原料ほうれん草については、80～100トンの作付け計画に拡大してきている。機械収穫を前提とした、冷凍工場のコントラクター的な取り組みが、人手不足に悩む生産者から支持を受けてきている。
- 冷凍用ホウレンソウの栽培については、50cmまで伸ばしても後半肥切れしない施肥設計と、機械収穫に適応する除草技術が確立し、栽培面積拡大基調に

2. 現状の課題の整理

- 人参の乱切り加工機械の導入⇒昨年はダイス加工しかできなかった
- 有機ブロッコリー、有機かぼちゃの原料作付け面積の拡大
- 有機認証の冷凍加工工場の地域拡大⇒原料作付け可能エリアが拡大
⇒品質の確保から、産地から冷凍加工工場の搬入時間は1時間30分を基準にしたい
- 猛暑のなかでの安定供給可能な有機野菜として、学校給食等業務需要への展開促進。
兵庫県とは給食納入業者と業務提携開始。欠品不可の学校給食には有効な有機食材

有機油脂作物の現状と課題

1. 有機ゴマ

- 国産比率が0.1～0.01と危険領域。
- 熟すと子実を包むサヤが弾けて種がこぼれてしまうので、収穫・乾燥脱穀・調整の機械による一貫体系が不可能。手作業のコストと、乾燥施設が必要
- イスラエルが機械の一斉収穫用の品種改良に成功というニュースが入っている。
日本への導入の可能性は？

2. 有機ひまわり

- 油分45%に迫る品種改良が進む。
- 油脂用品種の種子の導入支援により、景観用ひまわりを油脂用に転換。
- 各地で広がる景観用の品種を油脂用品種に切り替えるインセンティブを政策的にどうするか。
- 汎用コンバインの導入支援政策

有機油脂作物の現状と課題

1. 有機たかきび

- スーパーフードと言われるたかきびについて、機械収穫が可能な高さの系統の種子を4種類確保。これを増やす取り組みから始めている。
- 種子がある程度確保できれば量産体制に入る。
- 有機での栽培に技術的な問題なし。

2. 有機キヌア

- キヌアの専門業者が国内の生産者と直接取引を開始している。
- これらの業者と連携して、播種前契約を基本に取り組みを進めていきたい。
- 有機での栽培に技術的な問題なし。